

誇れる北中の実現

できる! だれでも! どこまでも!

大津の北に燦然と! 心配ご無用

図書室への渡り廊下が続く本校舎の出入り口。余震によって日に日に亀裂は大きくなっています。恐ろしい見た目ですが、これは表面的なもので、構造体に破損はないそうです。言われてみれば、本校舎は微細なヒビだらけです。

この度の地震で被災された全ての皆様に、深くお見舞い申し上げます。

平成二八年の前震の時、私はまだ学校で仕事をしていました。妻は長男を迎えに行っていて不在で、自宅にいたのは、当時九歳の長女と五歳の次女だけでした。揺れが収まった後、妻が家に着くと、二人は落ちたり倒れたりした物が散乱するリビングのテーブルの下で、身を寄せ合って泣いていたそうです。特に、五歳の次女は、この幼少時の恐怖体験によって、おそらく軽いPTSDになりました。それから長い時間をかけて、日々少しずつ少しずつ平常を取り戻していききました。しかし、小規模でも地震があれば呼吸は乱れ、心拍が上がり、恐怖の感情がこみ上げるのは今でも変わりません。ちなみに、長女は本震でも二度寝する猛者です。

そこで今回の地震です。私はこの日お休みをいただいていた、午後四時二七分は、十六歳になった次女と二人で自宅におりました。スマホの凄まじい警告音と共に大きな揺れが始まった瞬間、次女はテーブルの下に隠れ、震えながら頭を抱え、声をあげて泣きだしました。私もすぐにテーブルの下に入り、次女の背中をさすりながら「大丈夫、大丈夫」と声をかけ続けました。揺れが収まってしばらくすると平静を取り戻したように見えたのですが、私が北中に行くのに一人にはできませんので、そのまま連れていきました。そこからつい先日までの半月ぐらひは、一人にできない日々が続きました。

このように、平成二八年の熊本地震当時にも物

心がついたばかりぐらい（三、六歳ぐらい）の子どもたちは、幼いゆえに大変な恐怖を味わい、実際にPTSDになったり、トラウマになっている子どもが多いのではないかと思います。その子どもたちが今、中学生です。今回の地震で恐怖心がよくえった子どもたちが、三角コーンやロープで立入禁止の箇所が散在する学校の状況を見たときに、ショックを受けるのではと心配です。

現在、学校と大津町教育委員会とで危険箇所を再三確認し、学校再開までにできるだけ復旧できるように努力をしています。本校職員、大津町教育委員会の担当者だけでなく、専門家（文部科学省建設会社、大学教授等）も含めた複数の目で、複数回に渡って危険の有無を判断しました。現在、立入禁止、又は修復中の箇所は表面的、部分的な被害であり、建物の構造のような核心部分の損壊はありません。そして、それ以外の部分は大丈夫です。全てが修復されるまでにはもう少し時間がかかりますが、八月二六日（水）の学校再開には安心して登校させてください。「心配ご無用! 大丈夫だよ!」と、送り出してください。

え? 宿題も心配?... 大丈夫です。どうにかあります。とにかく、元気な顔を見せてくれるのが一番です! あ、台風も来てますね...

学校再開に向けた子どもたちの状況を測るため、子どもたちには、学校再開に向けて「心と体のアンケート」を実施します。タブレットの全校共有から、二三日（日）までに回答するよう、お声掛けをお願いします。また、お子さんのことで気になることがございましたら、遠慮なく学校までご相談ください。